

Title	魚のはなし
Author(s)	渡邊, 道郎
Citation	makoto. 1974, 7, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86246
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

魚のはなし

大阪府水産試験場長

渡邊道郎

狂乱物価と言うが、これすべ

て需要と供給とのアンバランスのなせるわざである。近い将来狂乱魚価、すなわち魚バニツクが訪れるであろうと言われている。「久しぶりにサバの煮付でも食べたいところだが、もったいないからビフテキで辛抱しよう。」などという時代がやってくる——いやもうそこまで来ている。

と云うのは、今年六月二十日からベネゼエラで開催される国連海洋法会議において日本の漁船が世界の沿岸二百カイリから閉め出される可能性が強い。そうなれば我国の年間総漁獲量約一千万トン中これらの海域で獲っている約五百万トンが獲れなくなる勘定だ。供給が半分になれば価格はどれだけ上るか判ったものではない。

このように見てくると誰しも考えることだが、日本の沿岸で魚を殖やしたらよい——栽培漁業をやればよいではないかとい

うことになる。

水産庁でも昨年からのことに気づいて開発途上国に漁業の資本提携を働きかけたり、全国に栽培漁業センターを各府県一つづつ設置することを決めたり、沿岸漁業の開発整備の法案をつくったりしている。

然しそのようなことで果してどれほどの魚が確保できるであろうか。私の勤務する水産試験場では約半数の職員が日夜この栽培漁業に取り組んで大阪湾の水産資源を殖やす努力をしているので、栽培漁業でどの程度魚バニツクを救えるのかを考えてみたい。

栽培漁業といってもハマチやタイなどを生簀で飼育し、与えて大きくするいわゆる養殖と、クルマエビやタイ、アワビなどから卵をとり、孵化させ、海へ放つてもあまり減らない大ききまで人の管理のもとに育てたうえ放流するいわゆる増殖とがある。

我々水産試験場でやっているのは後者の方である。国が今後大いに力を入れようというのも後者の方である。

例を我々が手がけているクロダイにとつて考えてみよう。クロダイは凡そ五月下旬頃産卵するが、雄は直ちに放精して受精卵となる。これを大切に水槽に移し、温度を加減しながら孵化させるのであるが、そこまでは大した苦勞もない。ただ別に大量のクロレラを培養し、さらにその中へ大量のワムンという動物性プランクトンを培養して準備しておかねばならない。

孵化後二〜三日もするとクロダイは餌を求めようになる。間髪を入れずクロレラとワムンを大量に与えねばならない。それも毎日二〜三回づつ。五〇万の稚魚に対して毎日一億数千万のワムンが必要なのだ。

このようにして二〇日もたつと今度は他の餌に切り替えねば大きくなる。魚の肉や

エビの肉などをすって与えてみる。なかなか餌につかない。このような人と魚の根くらべが毎年繰返されるのである。

そしてやっと三万か五万の稚魚(二〜三センチ)ができると、早速海へ放流するのであるが、その後はもっぱら海中の小エビや他の稚魚を食べて大きくなる。ここで考えてみるべきは、その餌を果して人の力で培養できるかどうかである。クロレラやワムンは海水と栄養塩類があれば培養できる。然しそのあとの餌はすべて同じ大阪湾に住む水産動物であり、一方が食べれば一方が減るのである。

このような関係はクロダイに限ったものではない。クルマエビでもカニでもみな同じことである。しかもクロダイ一グラムを増肉するためには七〜八グラムの餌料生物が減るのである。

私はつねづね「栽培漁業を推進すれば大阪湾は魚で一杯になる」という人に反論する。決して量は殖えるわけではない。栽培漁業の目的は魚の餌にしかならないような利用価値の低いものを高級な魚介類に置き換えるための努力である。

最後に私の言いたいことは、栽培漁業は大いに推進されねば

ならない。然し日本の漁獲減をカバーできるといった安易な期待は間違っている。むしろ栽培漁業で我々が放流する稚魚の何十倍何百倍の稚魚を水質の汚染などで殺してしまっていることを考え、海の環境保全のために一人一人が注意を払い、青い海をとりもどすことが第一であると考えるのである。

